
× × × (kiss ・ kiss ・ kiss)

月姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

x x x (k i s s ・ k i s s ・ k i s s)

【Nコード】

N 8 8 8 9 B

【作者名】

月姫

【あらすじ】

高校生平和が主役のキスを絡めた短編集。それぞれが独立した話です。第1話の前書きを必ずご覧になった上で読んで下さいませう、お願い致します。

(1) 挨拶(前書き)

この短編集は、下記サイト様からお借りしたお題を元に書いています。

管理人様より投稿作としての使用の許可を得ているものです。

『キスにまつわる20の御題』 (<http://tw.skr.jp/kiss/>)

今回、お題をお借りして書いたので、自分にルールを課しました。

- (1) 全て一人称。
- (2) 平・和、半々にする。
- (3) とにかく短く。
- (4) ラブ度MAX(当社比)。
- (5) 設定は高校生で。
- (6) オーソドックスなストーリーに。
- (7) いろんなトコにキス。但し、色っぽい場所は却下。

そしてもう1つ。

「キス」を書くにあたって、今回は「キスに至るまでの過程」を重視してみました。

なので、キスの部分はあつさり風味です。

楽しんで頂けると嬉しいです。

(1) 挨拶

「行つて来ます」

誰もいないんやけど、一応声を掛けて家を出る。

学校までは歩いて20分くらい。

平次ん家はアタシん家よりちょっとだけ学校に近いから、部活や委員会が時間が合はん時以外は、平次ん家に寄つて一緒に登校するんが日課。

「おはようございま〜す！」

玄関の引き戸を開けて声を掛けると、奥でオバチャンが平次を呼ぶ声が聞こえた。

いつもきちんと鍵の掛けられてる玄関は、この時間だけアタシのために開けられてる。
ちよつと嬉しい。

「けどなあ……」

たまには迎えに来て欲しいと思うんは、贅沢なんかなあ。

遠回りんなるとか、そう言う事は取り合えず置いて、恋する乙女としては『彼にお迎えに来てもらっ』ってシチュエーションにも憧れたりするやん？

一応『彼氏・彼女』なんやし。

そんな事考えてたら、相変わらず軽そうなカバンを抱えた平次が出て来た。

「おはよ」

「おう」

いつもは玄関に顔を出してくれるオバチャンは、忙しいらしい。

「行つて来まゝす！」

奥に向かって声を掛けたら、遠くから返事をしてくれた。

「なあ、平次。今日の1限の数学……」

門の所で振り向いたら、目の前至近距離にガクラン。
へ?と思つた瞬間、おでこに柔らかい感触がした。

「いつ……いきなり何するん!？」

顔が真っ赤になるんが自分でもわかる。

「何で、『おはよう』のキス。やっぱ、ご挨拶は欠かせんやろ？」

おでこを押さえて抗議するアタシに、平次はしれっとそう言つと、
スタスタと歩き出した。

……平次がキス魔なん、忘れてた。

人前ではそんな素振り見せんくせに、誰も居らんとこつやって触れてくる。

別に嫌なワケやなくて、どっちか言つと嬉しいんやけど、やっぱり困る時もある。

やって、こんな赤い顔で学校行つたら、絶対からかわれるもん。

……恋する乙女の憧れのシチュエーションは、夢のままで終わらせ
た方がええんかもしれない。

平次の背中をちよつとだけ睨み付けながら、アタシは明日からも服
部家に迎えに来ようと心に誓った。

keyword

「いきなり何するん？」（和葉）

『キスにまつわる20の御題』
(http://tw.skr.jp/kiss/)

(2) 肩越しに触れる

デートの予定を、3回続けてドタキャンした。
こう言う場合、たまに怒る事はあっても、大抵は苦笑で済ませてくれとる和葉が、何故か今回は拗ねてしまった。

夕暮れの帰り道、教科書の詰まった重いカバンを下げた和葉が、オレの前を歩いとる。

「なあ、和葉あ……」

オレの声に振り返りもせんと歩いて行く和葉の背中中、怒ってるそれやない。

「悪かったて」

多分、原因はドタキャンだけやないんやろう。
心当たりがありすぎて、絞り込めんけど。

せやけど、何の反応も返してもらえんのはキツイ。

「なあ、和葉あ」

しゃあないから、最終手段。

ちょっと近道なるから、二人で帰る時だけたまに通る児童公園。
お子様たちはもう家に帰ってて人気の殆ど無いそこは、今のオレには好都合。

ざっと周りを見渡して、人が居らん事を確かめて、和葉との距離を縮める。

「なあ、和葉あ」

返事もなく歩いとる和葉を後ろから抱き締めて、足を止めさせた。

「スマン。オレが悪かった」

取り合えずお詫びの言葉を繰り返して、耳元に口付ける。

「こっち向いてくれや」

内緒話みたいになさく囁いたら、和葉の肩がぴくんと揺れた。

keyword

「スネた和葉を後ろから抱き締めて、そつと耳元にキスをした」
（平次）

『キスにまつわる20の御題』（<http://tw.skr.jp/kiss/>）

(3) 腕を引く

休日の駅前、どっからこんなに湧いて来てん！？ってくらいの人込みを掻き分けて、前に出る。

先々週は事件追いかけて奈良に行つとつて、

先週は剣道部の練習試合。

勿論、一緒に居たんやけど、今週は特に依頼もないし、久し振りにデートやと浮かれとつたんに……。

「遅刻やゝっ!!」

二人で出かけるんはいつもの事。

どっちかが迎えに行ったりするんも、いつもの事。

せやけど、それじゃあ面白くない。

今までの『幼馴染』って肩書きに、やっと『恋人』って肩書きが加わったんやし、恋人っぽい気分も味わいたい。

ツレらが話しとるんを聞いとると、デートは待ち合わせからが基本らしいし、たまにはそんなもんもええなあつて、滅多にしない『待ち合わせ』なんぞしとるワケやけど……。

待ち合わせは午前10時。

今現在、時計は午前10時30分。

たとえ待つとるんが同じオンナでも、『幼馴染』待たしとるんと『恋人』待たしとるんは、気分的にかなり違う。

まずはとにかく謝つて、昼メシん時にケーキの1つも付けたつて、なんて走りながら考えとるあたりで、大違いや。

何はともあれ、目的地たる待ち合わせ場所まで、後およそ……。

「……ええ度胸やんけ、兄ちゃん」

ドスのきいた呟きが漏れたんは、ご愛嬌や。

残りの距離を一気にゼロにして、和葉の腕を掴んで思いつきり引つ張って、ナンパ野郎の視界から掻っ攫う。

「きゃあっ！」

倒れ込んで来た身体を抱き留めて、これ以上ないってくらい優越感を込めて、身の程知らずのナンパ野郎に見せ付けるように、和葉の頭のとっぺんにキスをした。

「平次？」

「おう、遅れてスマンな」

呆然としとるナンパ野郎には、たつぷりと殺気を込めた視線をくれてやる。

オレのオンナに手え出そうなん、10億年早いんじゃ、ボケー！

慌てたように人込みに紛れてく背中に、心の中で思いつきり悪態ついて、嘲笑一つ。

「いきなり何するんよ！」

「スマンで。ケーキで手え打ってくれんか？」

赤い顔してぶつぶつと不満を並べる和葉を腕の中から解放して、代わりに手を繋ぐ。

「……アップルパイとフルーツパフェ」
「了解」

案外安上がりなお姫様を連れて、デートに繰り出した。

keyword

「オレのオンナに手え出すなや？」（平次）

『キスにまつわる20の御題』（<http://tw.skr.jp/kiss/>）

(4) 泣き顔

夜中にふと目が覚めた。

依頼で来た山奥の温泉宿。

また工藤らと鉢合わせて、毛利のオッサンが酔い潰れとる間に事件を解決して。

いつも通りのハズやのに、何かが引つ掛かっつたんやろう。

「……服部？」

オレが起き出したんに気付いたんか、隣の布団で寝とつた工藤が、眠そつな声を掛けて来た。

毛利のオッサンは奥の部屋で寝こけとる。

廊下を挟んだ向かいの部屋では、和葉と姉ちゃんが夢ん中。

そんな時間。

「ちょお目え覚めてもつたから、散歩でもして来るわ」

「不審者に間違われんなよ？」

「やかましわ。お子様は寝とり」

布団の上に掛けとつた丹前を羽織つて、部屋を出た。

そこに行つたんは、偶然やつた。

別に何処に行こうとか考えとつたワケやなくて、ただ何となく歩いていて、

和葉を見つけた。

廊下の端、自販機も何もない、ただ忘れられたように椅子が幾つか置いてあるだけの所で、長椅子の隅に腰掛けて、大きな窓から射し込む月の光を浴びながら、空を見上げとった。

多分、泣いとるんやろう。

驚かせないようにそっと近づいて、隣に座った。

「今日、満月やったんやな」

和葉からの返事はない。

声を上げる事もなく、しゃくりあげる事すら拒むかのように、ただ静かに、涙を流してる。

……この季節、和葉は時々こんな泣き方をする。
その理由を知つとるオレは、知つとるからこそ、慰める言葉も掛けられずに、ただ傍に居る事しか出来ない。

「押さえ込まんと、思いつきり泣いとき？オレの傍でやったら、いくら泣いても構わんから」

秋の夜の冷たい空気を遮ってやりたくて、抱き締める。

和葉がこんな寂しい泣き方をする原因を、オレは取り除いてはやれんから……。

「オレはここに居る。ずっとオマエの傍に居るから」

呪文のように繰り返しながら、涙を浮かべた目元に口づけた。

何度も、何度も。

……和葉が眠りにつくまで。

keyword

「ただ静かに涙を流している和葉が、あんまりにも痛々しかった」
(平次)

『キスにまつわる20の御題』 (<http://tw.skr.jp/kiss/>)

(5) 冷たい手を暖める

合気道の演武大会に和葉の応援に来て、準決勝が始まる言う時に事件が起きた。

女子更衣室の一つで起きた殺人事件の原因は、よくある三角関係。ちやちなトリックは偶然に助けられて上手い事機能して、崩すのにちよお時間が掛かった。

「ん」

『KEEP OUT』のテープを潜って、大きく伸びをする。不思議なモンで、あの黄色いテープの内と外やと空気が違う。一種の結界みたいなモンやな。

深呼吸を一つして、廊下の窓から夕焼けに染まる空を見上げた。

「和葉、勝ち残ったたんになあ……」

事件が起こらんかったら、優勝もいけてたかもしれんのに。そう思うと、何や悔しい。

和葉はあんまり後に引きずるタイプやないから、今日の事も自分の中でケリ付けるんやろうけど、ちゃんと最後まで試合させたりたかった。

そんな事考えながら、建物の入り口で野次馬が入り込まんように警備しとる警官に会釈して、外に出る。思った以上に、空気は冷えとった。

「もうすぐ冬やなあ……」

事件が起きてすぐ大会が中止になったから、今残っとる人は少ない。

参加者や観客の熱気の引いた会場は、気温以上に冷え込んだように感じた。

「平次！」

私服に着替えた和葉が、スポーツバッグ片手に駆け寄って来た。

「終わったん？」

「おう」

胴着やら何やら入れられて、ちょっとばかり重くなつとるバッグを取り上げる。

今日は試合で疲れとるやろし、まあ、たまにはな。ついでに手を繋いだ。

「ありがとお」

嬉しそうに笑う和葉の手は、すっかり冷えとった。

「……ずっと外に居ったんか？」

「うん」

「あつたかいトコに居ればええのに」

「そうしよかなて思たけど、ここの方が平次が出て来るん、すぐわかるやん？」

あつさり返す和葉の手を持ち上げる。

気持ちは嬉しいけど、心配になるセリフやな。

「何？」

「あつたかくて安全なトコに居れや」

白い指先に軽くキスして、繋いだままの手をポケットに突っ込んだ。

keyword

「冷え切った白い手をそっと包み込んで、指先に口づけた」(平次)

『キスにまつわる20の御題』(http://tw.skr.jp/kiss/)

(6) お礼

やっぱり男手あると助かるわあ。

アタシは改めてそう思った。

アタシんトコはお父ちゃんと二人暮らし。

いつもならお父ちゃんが居る時に行くんやけど、何やかやと時間が合わなくて、平次にピンチヒッターを頼んだ。

こんな事は時々……って言うか、結構ある。

平次は横でぶつぶつ言うてるけど、別に大した事頼んだワケやないんよ？

ちよつと買い物に付き合ってもらただけ。

まあ、その場所が、主婦で賑わうスーパーやったってだけで。

……時間的に、丁度混んどったりしたけどな。

……学校帰りで制服のままやったから、ちよお浮いてたかもしれないけど。

それだって、そう珍しい事やない。

「いつもの事やん？」

「……買い物付き合わされたんを、どうこう言うてるんとちゃうわ」「じゃあ、何なん？」

「オマエ確か、野菜買いたいけど一人やとあんま持てんから、手伝ってくれ言つてたよな？」

「うん」

「で、それが何でこうなるんや？」

アタシの前に回りこんだ平次が、足を止めて荷物を突き出して来た。

平次の右手には、宣言通りに野菜の詰まったスーパーの袋。
根菜が多いから、ちょお重いかもしれない。

アタシの右手にも、スーパーの袋。
こっちは葉ものの野菜やから、そんなに重くない。

「野菜やん？」

「こっちや、こっち」

意識して見ないようにしてた平次の左手には、お米の袋。
それも10キロ入りのヤツ。

「それ、美味しいんよ？なかなか見つからないんやけど、珍しく出
てたから」

「……………」

「代わりに鞆持っただてゐるやん？」

「当然やろ」

「お礼に、明日そのお米でお弁当作っただげるし」

やっぱり不満そうな平次。

大きなため息ついて、右手の荷物を左手に引っ掛けたなと思ったら、
後頭部を押さえ付けられた。

「お礼言ったら、普通コツチやろ？」

あっさりそう言ってのけた平次は、また荷物を両手に持ち直して歩
き出した。

……そんな、お約束のベタなネタ、今やらなくてもええやん！
天下の公道やねんで！

こんなトコでキスやなんて、恥ずかしいやんかあ！

言いたい事は山ほどあったけど、アタシの口からは何一つ出てこなかった。

「さっさと帰んで！」

少し先で振り返った平次は、何故だか笑ってた。

……アタシ、もしかして遊ばれとるん？

めっちゃびっくりしたのに、卵が入ってるから気合で落とさずにいた荷物を握り締めて、ちょっとだけ考え込んでしまった。

keyword

「『お礼言ったら、普通コツチやる?』って、何?」(和葉)

『キスにまつわる20の御題』(http://tw.skr.jp/kiss/)

(7) いめんなさい。

平次の左手首には、少し長めのリストバンドが着けられてる。
その下に包帯が巻かれてる事を知ってるのは、アタシだけ。

昨日、遊びに行ったハズの水族館で何故だか事件に巻き込まれ、いつものように平次が首を突っ込んだ。

事件自体はすぐに解決したんやけど、逃げようとした犯人が、どこに隠してたんかナイフなん振り回し始めたから、それを押さえようとした刑事さんたちと揉み合いになって、たまたま傍に居たアタシはそんな誰かに思いっきり突き飛ばされた。

「和葉！」

どこをどう動いたんか、バランスを崩して転びかけたアタシを、少し離れた所に居たハズの平次が受け止めてくれた。

「あ……」

「つつ……」

『ありがとう』と言いかけて、言葉が途切れた。

アタシの目の前には、平次の腕。

「平次!？」

「……ボケつとしとるなや、アホ」

水族館の淡い光の中やと、平次の腕を染めた血の色も暗く沈み込んで、酷く現実感がないんやけど……。

「ゴメン……」

突き飛ばされて、偶然犯人の前に出てもったアタシに向けられたナイフは、アタシの代わりに平次の左腕を傷つけた。

診察室から出て来た平次の左腕には、手首の所から5〜6センチくらい、真っ白い包帯がきつちりと巻かれていた。

「どうやった？」

「大した事ないで」

平次の腕の傷は、幸いそんなに深いものやなくて、お医者さんは、縫う必要もないし痕も残らないって言うてくれたらしい。

「3日たったら見せに来い言われたわ」

そう言つて、包帯の巻かれた左腕をひらひらと振って見せる平次を、アタシは慌てて止めた。

「傷、開いてまうやん！」

「大丈夫やて」

「ダメ！」

平次の腕を抱え込むようにして、やめさせる。
いくら酷い怪我やない言うたかて、痛みはあるんやし、無理したら
治りも遅くなる。

「……ゴメンな」

アタシの目の前には、真っ白い包帯。

「オマエに怪我なくて良かったわ」

空いた右手で、平次が優しく髪を撫でてくれる。

アタシは精一杯の『ごめんなさい』の気持ちを込めて、包帯にキス
をした。

keyword

「左手首のリストバンドは、包帯を隠すため」（和葉）

『キスにまつわる20の御題』（<http://tw.skr.jp/kiss/>）

(8) 我慢できない

和葉と、世間一般で言うところの『恋人』になって、もうすぐ2ヶ月。

始めは何となく慣れなくて、ぎくしゃくした事もあったんやけど、最近はやくサマになって来たと思う。

誰かに訊かれた時に、お互いを『彼女・彼氏』と応える事も出来るようになったし、時々手繋いで歩いたりもするようになった。

せやけど、そこまで。

そこから先に進めずに、ずっと足踏みしとる状態。

オレも健康で健全な高校生男子やし、それなりにステップアップしたいんやけど……。

告白した勢いで、初めてのキスをした。

それ以来、和葉はキスを避けとる。

オレがキライやとか、

触れられたくないとか、

そう言う事やなくて、ただ戸惑つとるだけらしい。

それはわからなくもないんやけど、やっぱりオレにも我慢の限界っ

ちゅうのはあるワケで……。

二人で出掛けた帰り道、いつものように和葉を家まで送り届ける。
門を開けるために背中を向けた和葉に、オレの中のどっかで、何か
が弾けたような気がして、身体が自然に動いた。

「和葉」

名前を呼んで、振り向いた所を捕まえて、逃げられんように囲い込
んで、

「な……」

『何?』と言おうとしたんやろう唇を、塞いだ。

keyword

「オレやつて、健康な高校生男子やねんぞ？」（平和）

『キスにまつわる20の御題』（<http://tw.skr.jp/kiss/>）

(9) 眼鏡を外す

ちよつとばかり有名な平次は、時々変装する事がある。

平次は基本的に周りの視線を気にせんし、女の子の秋波なん気付きもしないんやけど、それでも煩く感じる時があるらしい。

それは、剣道の大会の後やったり、新聞や雑誌に載った時やったりする。

変装言うても、前に工藤君に化けた時みたいなんやなくて、いつもはあんまり着ないジャケットを着てサングラスを掛けるだけ。

そんな格好で、Gパンのポケットに手突込んで立っていると存在感抜群やと思うんやけど、平次に言わせると、不思議と視線を感じなくなるらしい。

アタシに言わせれば、そう言う時の平次はちよつとだけ不機嫌な事が多くて怖そうに見えるから、見ないようにされてるだけなんやないかと思うんやけど、前にクラスメイトが駅で会ってわからなかった言うてたし、もしかしたら変装は成功してるんかもしれない。

「あ……」

どうやら今日は変装気分だったらしい。

珍しくアタシより早く待ち合わせ場所に居た平次は、ジャケットにサングラスの例のスタイルやった。

「お待たせ!」

「おう、待ったで」

「でも、遅刻はしとらんよ?」

いつもの言葉遊びみたいな会話をしながら、平次を見上げる。

……どこからどう見ても平次やと思うんやけどなあ。

そんな事考えてたら、平次が怪訝そうに眉を寄せた。

それを無視して、サングラスを取り上げる。ついでやから、ちよつと掛けてみた。

「何で、こんな眼鏡一つで、みんな平次やてわからなくなるんやろ?」

「人の目なん、そんなモンやろ? まあ、オマエ誤魔化すんは無理やけどな」

苦笑混じりにそう言った平次は、アタシからサングラスを外すと、それをポケットに引っ掛けた。

「アタシ、平次が着ぐるみ着ててもわかると思っで?」

「確かに、オマエやつたら見破りそうやな」

平次が可笑しそうに笑って、アタシのこめかみのトコに、小さなキスをくれた。

keyword

「ちよつとばかり有名な平次は、時々変装する事がある」(和葉)

『キスにまつわる20の御題』(<http://tw.skr.jp/kiss/>)

(10) 仲直りのちゅー

金曜日、学校帰りに平次とケンカした。

……いつもの事やったから、原因なん忘れた。

土曜日、平次は名古屋に行った。

……依頼の手紙が来とって、本当なら、アタシも一緒に行くハズやった。

日曜日、一日家に居た。

……蘭ちゃんに電話したら、惚気られてもうた。

「メールくらいくれたってええやん」

携帯に向かって愚痴ってみる。

いつもの事でも、ケンカしたままなんはやっぱ辛いから、昨夜メール送ったんに。

依頼で出掛けとるから邪魔したらアカン思て、電話やなくてメールにしたんに。

アタシから『ごめんね』メールしたんに。

シカトってどーいう事なん!?

右手が思わずグーになる。

「アホ平次」

ベッドの上にポイッと携帯を投げたら、今お気に入りのラブソングが流れ出した。

このメロディは平次からのメール専用。

「遅いじゃん」

一応文句は言ってみても、思わず笑顔になってまう。
アタシもやっぱり恋する乙女やもん。

「……って、何なんコレ？」

メールはたった一言。

『もうすぐ帰るから待つとれ』

これだけ。

アタシの『ごめんね』にこの返事なん！？
待つとれって、今何時やと思つとるん！？
寝不足は美容の大敵やねんで！？

言いたい事はいっぱいあったんに、何一つ言えんかった。
……言わせてもらえんかった。

やって、顔見るなり『スマン』やなんて言われて、いきなりキスさ
れたら、何も言えんくなるじゃん？

「いきなり何なん？」

「仲直りのちゅー」

「……アホ」

二人で笑って、もう一回。

仲直りのちゅーは、いつもよりもっと優しかった。

keyword

「喧嘩の原因なんて忘れた。いつもの事だから」（和葉）

『キスにまつわる20の御題』（<http://tw.skr.jp/kiss/>）

(11) 無理やり

乾いた音を立てて、和葉の平手がオレの頬を打った。
オレは何も言えずに、ただ熱を持ち始めた頬の痛みを、遠くに感じ
てた。

きっかけは、他人に言わせれば多分些細な事。
オレが過剰に反応しただけの事。
せやけど、オレにはガマンならなかった。

自分がこんなに心の狭い男やなんて知らなかった。
一人のオンナにこんなに執着するとは思わなかった。

いや、どっかで気付いたった。

今までは自分ではめた枷で抑えとっただけで、オレは本来、人一倍
独占欲や支配欲が強くて、嫉妬深い男なんやと。

口の中に広がった血の匂いで、やっと周りが見え始めた。

学校内でも滅多に人の通らん、特別教室棟の裏。
コンクリートの壁に背中を預けた和葉。

髪もリボンも制服も、うつすらと灰色に染まってるんは、オレが押
さえつけたから。

……嫌がる和葉を押さえつけて、無理矢理キスしたから。

「何でこんなコトするん？」

大粒の涙を浮かべた和葉は怒っとるワケやなくて、ただただ哀しそ
うで、胸が痛んだ。

「アタシは平次しか見とらんのに……平次しか要らんのに……信じてももらえないん？」

俯いた和葉を、そおつと抱き締める。

今度は抵抗されんかった。

和葉はいつだって、オレに全てを預けてくれる。

それすらわからんようになる程に、頭に血が上った。

「……すまん……オレが悪かった」

腕の中で小さく震える肩と、縋り付くようにオレのシャツを握り締める手の感触が、堪らなく愛しかった。

keyword

「拒む和葉を押さえつけて、無理矢理奪った」(平次)

『キスにまつわる20の御題』(http://tw.skr.jp/kiss/)

（１２）「これでよければ。」

平次の家には小さな離れがある。

小さい言つても、８畳の座敷が３つと手入れされた水回りがあつて、ちよつとした家くらいはあるんやけど。

「いい天気やね」

離れの縁側に並んで座つて、淡く霞む春の空を見上げる。

風はまだ冷たいけど、陽射しがぽかぽかと暖かい。

『花見しようや。明日昼までには帰るから、家に来とれ』

依頼で出掛けてる平次からそんなメールが来たんは、昨夜の事。

アタシに異論がある筈もなく、予定通り帰つて来た平次と、離れでお花見する事にした。

本当は、どつか出掛けたかつたんやけど……

そつと隣を窺つてみた。

のんびりと桜を見てる平次は、何となくキツそうに見える。身体的にやなくて、精神的に。

他人には絶対に悟らせないそれに気付いても、アタシに出来る事なんて何もない。

ただ、邪魔にならんように傍に居るだけ。

「お茶、煎れ直そうか？」

「ん？それより、何や眠いわ」

「ブランケット持って来とるし、少し寝る？」

「せやなあ……」

大きな欠伸をした平次が、座敷の方に移動して寝転んだ。

ガラス戸を閉めると、陽射しだけが入って結構あったかい。

それでも、そのまま寝たら冷えてまうから、ブランケットを広げた。

「一眠りしたら、スッキリするやろ？」

「……そんな疲れた顔しとるか、オレ？」

「うん、ただ何となくキツそうやなあと思って」

「……バレとるんならええわ。ちょお手え貸せ」

「手？」

この手の事？と右手をひらひらさせたら、ぐいっと引っ張られた。

「暫く貸しとけ」

「うん」

平次は、大抵の事は自分の中で処理してしまうから、アタシに出来る事なんて殆どない。

時々、それが酷くもどかしい。

せやけど……

「こんなんで良かったら、いくらでも貸したるで？」

すっかり寝入ってしまった平次に小さく囁いて、瞼にそっとキスをした。

keyword

「アタシは何も持っていない」(和葉)

『キスにまつわる20の御題』(<http://tw.skr.jp/kiss/>)

(13) 背伸びをする

最近、気になる事がある。

ううん、ホンマは随分前から気になってた。

平次はまた、背が伸びた。

ちっちゃい頃は、アタシの方がちょっとだけ大きかった。

小学生の頃は多分同じくらいで、中学生の頃にはもう、アタシより大きくなってたと思う。

それでも、そんなに差はないと思っと思ったのに……。

「ホレ、コレやろ？」

「……ありがと」

平次が手渡してくれたんは、台所の吊り戸棚の上の段に仕舞ってた、小振りのタッパ！。

こんな風に、アタシの手の届かない所にある物も楽々と取ってしまいう平次を見ると、時々すごく寂しくなる。

アタシの見てる世界と、平次の見てる世界で、ホンマに同じなんやるか？

急に不安になって、平次の肩に掴まって、思いっきり背伸びしてみた。

「何やってんねん？」

「平次にはどんな風に見えてんのかな、思て」

「は？」

「せやから、アタシより背え高い平次には、アタシよりもずっと遠くまで見えてるんかな、思て」

寂しくなるんも、不安になるんも、全部『置いてかれるのが怖い』って感情から来てるんやろなって事は、何となくわかってるんやけど……。

「平次にはわからんよね」

アタシがこんな事考えてるなんて、きつとわからんのやろうけど。

背伸びをしてるんにも疲れて、踵を下ろす。

「まあ、背え高い方が遠くまで見えるけどな。オマエも遠く見たいんやったら、抱っこしたるか？」

「していらん」

からかうように両手を広げる平次の腕を、ぺちんと叩く。

何だか無性に悔しくなって、目の前にあつた平次の肩先に、ちゅ、とキスしたった。

keyword

「同じ背丈だったのはつい最近の事だったような気がするのに、今は背伸びをしないと届かない」(和葉)

『キスにまつわる20の御題』(<http://tw.skr.jp/kiss/>)

(14) 寂しいの

和葉の様子がおかしい。

多分、誰も気付いとらんけれど。

父親と二人暮らしの和葉が、おっちゃんが帰れない日にオレン家に来るのは、よくある事。

大抵はオカンが呼んどるけど、ごくたまに自分から泊まりたいと言ってくる。

特に、冬の近づいて来たこんな季節には。

にわか四人家族の晩メシの後は、オレの部屋でだらだら過ごす。

オレはベッドで読書。

和葉はベッドに寄っ掛かってゲーム。

いつもの事やのに、和葉の様子がおかしい。

理由は多分……。

ベッドの上をこそこそ動いて和葉の後ろに陣取って、しつぽをくいと引っ張った。

「何すんの!？」

「オマエ、何さっきから同じト」で躓いとんねん」

「……ほっとき」

「考え事しながらやっとするからやろ？」

「……………」

黙り込んだ和葉を、緩く抱き締める。

「我慢せんでもええんやで？」

うつ伏せに寝そべった体勢で和葉抱き込むんは、ちよつと背中に負担が掛かるけど、今オレが出来るのはこんな事だけやから。

「オマエの気持ち、ちゃんと試ってみ？」

「……………」

意地っ張りな和葉。

こんな時は、ただ問い詰めても口を割らんから、長期戦覚悟でオレも黙り込んだ。

和葉が口を開いたのは、ゲームのオープニング・デモ画面が3回目に入った時。

「……………いん」

「ん？」

「寂しいんよ……………」

「大丈夫や。オレがずっと傍に居つたるから」

やつと本音を吐いた和葉の、微かに震えるしつぽにキスを一つ。
オレはその原因を取り除いてはやれんけど、傍に居てやる事は出来るから。

「オマエが逃げ出したなるくらい、傍に居る」

ゆつくりと、言い聞かせるように囁いて、目の前に晒されてる白い項にキスをした。

keyword

「オマエの気持ち、ちゃんと試ってみ？」（平次）

『キスにまつわる20の御題』（<http://tw.skr.jp/kiss/>）

(15) 初めて

和葉に気持ちを告げたんは、先週の日曜日。

オレと同じ気持ちを返してくれて、めっちゃめっちゃ嬉しかった。

……嬉しかったんやけど、何や微妙に距離が出来た。

多分、誰もわからんと思うんやけど、立ち位置がほんの1センチくらい離れたような気がする。

「平次く居てる？」

いつものように、ノックもなしに和葉がいきなりドアを開けた。

「宿題教えて？」

夏休みも残す所あと10日、この時期になると毎年、和葉は残った宿題を抱えて来る。

オレが残った宿題に手を付けるんは1週間を切ってからやから、机は和葉に譲って、ベッドに寝転がって買ったばかりの雑誌を眺める。

「これ、どうやったらええのん？」

「どれ？」

「問2」

お呼びが掛かったから、和葉の横に立った。

今までと同じように立ったつもりやったけど……。

シャーペンを持った和葉の手が、ほんのちよつとだけ左に動いて、

机に付いたオレの手は、いつもよりちよつとだけ右にあった。

ああ、そうか。

何か、突然わかった気がする。

『幼馴染』と『恋人』と、その境界線がわからない。

せやから、お互いの距離が掴めなくて、戸惑つとるんや。

「オレはオレやし、和葉は和葉なんに」

「え？何？」

オレの独り言が聞こえたんか、和葉が首を傾げて見上げて来る。

「なあ、和葉。オレらの関係が『幼馴染』でも『姉弟』でも『恋人』でも、オレがオレで、和葉が和葉なんは変わらんよな？」

「……うん」

「『恋人』になったから『幼馴染』止めんでもええやんな？」

「……うん」

「無理に変わろうとせんでもええやんな？」

「うん……」

和葉の手が右に戻って、オレの手が左に動く。

いつもの『幼馴染』のオレらの距離。

それから、ちよつとだけ近づいて、指先が触れた。

これは多分『恋人』のオレらの距離。

自然に縮められた距離に後押しされて、そおつと唇を重ねた。

初めて触れた唇の、柔らかくて優しい感触と、どこか花のような甘

い香りは、多分一生忘れられんと思った。

keyword

「そつと触れた唇は、柔らかくて優しくて、そしてどこか花の香りがした」(平次)

『キスにまつわる20の御題』(<http://tw.skr.jp/kiss/>)

(16) 何味？

『あの映画のDVD、レンタル出来たけど観るか？』

平次からメールが来たのは、晩ゴハンの片付けが丁度終わった時。

『観る！』

急いで返事を送って、待つ事5分。

今度は、携帯やなくてインターフォンが続けて2回鳴った。

この鳴らし方は平次。

「行つて来ます！」

居間でお茶を飲んでるお父ちゃんに声を掛けて、玄関に急いだ。

お父ちゃんは、平次んトコやったら、連絡さえちゃんとしてれば何も言わない。

「あんまり遅うなるなや？」

「ちゃんと送り届けるよって、心配せんといてや！」

居間から声だけ掛けて来たお父ちゃんには、平次が応える。

部活仲間と駅前まで出てた言う平次はまだ制服のままで、軽そうなかバンとレンタルショップの袋を抱えてた。

平次ん家とアタシン家は、ゆっくり歩いても5分くらいの距離。

家に着くなり『ハラ減った』と騒ぐ平次が着替えてる間に、オバチヤンに『お邪魔します』の挨拶をして、平次の晩ゴハンが終わるの

を待つて、部屋に移動した。

「帰りに寄ってみたら、丁度返却棚にあってな」

そう言つて平次が袋から取り出したんは、ちよつと前に流行つた洋画。

観損ねてたそれがレンタルされるんを、アタシは楽しみにしてた。

「まだ新作やから、今日中に返そ思てメールしたんや。来ない言うたら、延滞料オマエに請求しよ思てたんやで？」

「じゃあ、そのレンタル料は平次が持つてくれるん？」

「オレも観たかつたしな、当日料金は持つたる」

ちよつと偉そうに笑つて、平次が定位置に座る。

アタシも隣に座つて、ベッドに寄つ掛かった。

二人の間には、小振りのお盆が一つ。その上には、アイスコーヒーとオレンジジュースとクッキーとポテチ。

平次の部屋で映画観る時のアタシたちの定番。

ポテチ片手に、平次がリモコンを押した。

エンドロールが流れるまでは、一緒に居つても基本的には一人の間。

ちよつとだけ余韻に浸つて、ふつと息をついて、平次の存在を思い出して、いつもの二人に戻る。

今日もそのハズやつたのに……。

エンドロールが流れ始めて何気なく隣を見たら、丁度アタシの方に振り向いた平次と目が合った。

映画は別にラブロマンスやなかったんやけど、二人とも何となく雰囲気飲まれてたんやと思う。

極々自然に近づいて、気付いたらキスしてた。

…… コーヒーの香りがする。

触れてたのはほんの僅かな時間やったのに、それだけははっきりとわかった。

『ファーストキスはレモン味』とか、よく聞くフレーズやけど、アタシのファーストキスは、平次の飲んだコーヒーの香りやった。

…… アタシ、暫くコーヒー飲めんかも……。

keyword

「ファーストキスはレモン味とか言うけど、アタシのファーストキ

スはコーヒーの味だった」(和葉)

『キスにまつわる20の御題』(<http://tw.skr.jp/kiss/>)

（１７）不意打ち

いつも平次にドキドキさせられて、時々悔しくなる。
やって、アタシばかり好きみたいやん？

……まあ、それは否定出来んのやけど。
せやけど、やっぱり悔しいから……。

平次は今、パソコンに向かっている。

多分、事件の資料纏めとるんやろう。

ベッドに寄り掛かって雑誌を読むフリしながら、そおつと様子を伺う。

あんまり見とると気付かれるから、飽くまでもそおつと。

焦ったらアカンで、アタシ。

ドキドキする胸を押さえて、さり気なく立ち上がる。

アタシがドキドキしてどうするん？

本末転倒やん！

そう思っても、緊張してまっ。

しゃあないやん？

こんなん、初めてなんやもん。

頑張れ、アタシ！

「何や？」

横に立ったアタシに、平次が問い掛けてくる。

「何もないよ？」

そう返事して、画面を見たままの平次の頬に、ちゅ、とキスをした。

『鳩が豆鉄砲くらったような顔』言っんかな？

勢い良く振り返った平次は、目を丸くしてる。

「……びつくりした？」

「心臓止まるかと思った」

アタシの顔が真っ赤なんは自分でもわかつとるけど、平次がちよつとだけ顔赤くしとるように見えるんは、気のせいかな？

「お返しや」

そう言った平次に頭を抱え込まれてまったから確認出来んかったけど、代わりに心臓の音が聞こえた。

もしかして、ドキドキしとるん？

平次のシャツをキュッと握って、アタシは小さな幸福を噛み締めた。

keyword

「へへ、びっくりした？」（和葉）

『キスにまつわる20の御題』（<http://tw.skr.jp/kiss/>）

(18) 弱み

『ネコは炬燵で丸くなる』

思わず歌いたなつてまうような光景に、ちよつとばかり力が抜けた。休日や言うのに部活のミーティングに引っぱり出されて、昼メシも喰わんとハラ減らして帰って来たら、家の者は誰も居らんのに、他人ん家の居間で炬燵に懷いて昼寝をかますオンナが一人。

「おい」

……熟睡中らしい。

あまりの呑気さに、眩暈がしそうや。

まあ、赤ん坊の頃から一緒に育ったオレらにとっては、お互いの家はもう一つの自宅みたいなモンやねんけどな。

立ったまま見下ろしとるんも何やし、隣に座る。

ネコにするように頭を撫でたつたら、ふにゃあっと笑った。

ガキン頃の夢でも見とるんやろか。

……つて、ちよお待て。それやと、オレの手はおっちゃんの手に変換されとるって事んなるで？

何や、また力抜けてきた。

自分で自分へコませて、どないすんねん。

「平和な顔して寝とるなや」

八つ当たり気味に、むに、と頬を摘んでみても、和葉は起きない。

無邪気で無防備で天然。

そんなトコにも惚れとるし、直して欲しいとは思わんけど、そう言う所に付け込んで来るヤツもおるから、心配の種は尽きない。

「知つとるか？オマエはオレの唯一の弱みなんやで？」

結構怖いもの知らずで、大抵のモンはすっぱり切り捨てられるオレの、唯一の弱点は和葉。
コイツを捕られたら、オレは動けなくなる。

……裏を返せば『逆鱗』や言う事やけどな。

「氣い付いとらんやろな」

ため息一つついて、呑気に眠る和葉の鼻先に、掠めるようなキスをした。

keyword

「平和な顔して眠ってるコイツは、自分がオレの唯一の弱みやなんて気付いとらんのやろな」(平次)

『キスにまつわる20の御題』(<http://tw.skr.jp/kiss/>)

(19) 告白した

オレが海で仕掛けた小さな悪戯。その成果は今、和葉の背中に綺麗に残ってる。

「何なん？」

ベッドの上に雑誌を広げてうつ伏せに寝っ転がってる和葉が、不意に顔を上げた。

「何や、背中に視線感じるんやけど……」
「気のせいやろ？」

ちよつとばかり不審気に眉を寄せる和葉に軽く返して、携帯を手に椅子から立ち上がる。

今日の和葉の服は、ホルダーネックとか言うヤツで、綺麗な肩甲骨が剥き出しになっつて、オレの悪戯の跡がよう見える。

メールチェックしてるフリしながら、さり気なく和葉の後ろに回って、ベストポジションを探した。

うん、こんなモンやろ。

合成されたシャッター音と共に、携帯の画面に目当てのものが写った。

「何しとるん!？」

その音に飛び起きた和葉が、くるっと振り返る。

「何で背中ばつか見とるん？」

「知りたいか？」

「やっぱり、背中見てたんやん！」

「見とつたで？」

携帯を操作しながらにやっと笑ってやったら、探るような瞳を向けられた。

何か企んどるとでも思っとなるんやろう。

……いや、企んどらん言うたらウソになるけどな。

「あ、メール。これって平次の……つきやあつ！」

和葉の意識が逸れたんを逃さずに、ベッドに上がり込んで後ろから抱き付いた。

なるべく反撃受けんように、二の腕の上から押さえ込む。

「オマエの背中見てた理由やで、ソレ」

抗議の声を上げる和葉にそう言ってやる。

一応大人しくなった和葉の、携帯を持った手元を覗き込むと、丁度画像が現れた所。

小さな液晶に映し出されたんは、和葉の首筋から右の肩甲骨にかけて。

殆ど日焼けしとらん白い肌ん中、肩甲骨の上にだけ小さなハート型の日焼けがある。

「っ!？」

「可愛えやる？」

一瞬間まった和葉は、次の瞬間、耳まで赤くして暴れ始めた。
気に入らんかったらしい。

「平次のスケベ！変態！シミんなったらどうしてくれるん!？」

ぎゃいぎゃいと騒ぐ声は取り敢えず無視を決め込んで、オレの腕から逃れようと和葉がもがいたおかげで、工工塩梅に目の前に現れた小さなハートに、ちゅーを一つ。

そしたら、ますます抗議が激しくなった。

「恥ずかしいやんかあ!」

ちよつと泣きが入ってきとる。

……さて、どうやって宥めたモンか。

keyword

「最近オレがオマエの背中にキスしとるわけ」(平次)

『キスにまつわる20の御題』(<http://tw.skr.jp/kiss/>)

(20) それは反則!!

いつの間にかオレより小さなつてた和葉。

ずっと同じ目線で話してたのに、少しずつ見下ろすようになって、今ではもう頭半分以上、オレの方がデカくなった。

多分、もう少し差が出来ると思う。

まあ、それは仕方ない事やねんけど、和葉に見上げられるようになって、問題が1つ出て来た。

秋晴れの日曜日、新しいマフラーが欲しい言う和葉と、デートを兼ねて買い物に出た。

あちこち回って散々迷った和葉が、ここで決める言うて店に入つて30分、ようやく気に入ったモンを見つけたんか、紙袋片手に戻つて来た。

「お待たせ!」

「おう、待ったで」

「こーゆう時は『早かったな』言うんが、彼氏の基本やで?」

「残念ながら、今のオレは『幼馴染』なんや」

「なら『お姉さま』の命令は絶対やん?」

「誰が『お姉さま』やねん?」

「アタシ」

上機嫌な和葉が、腕を絡めてくる。

「お茶しょ?」

オレを見上げるようにして、にっこり笑う。
その表情があんまりにも無防備で、眩暈がした。

「どうしたん？」

反応の薄いオレを不審に思ったんか、ちょっと首を傾げて覗き込んできた。

つり目ぎみの、猫みたいな大きな瞳には、何の警戒の色もない。

……それは反則やろ。

和葉は絶対そんな気はない言うやろうし、本当に無意識なんやろうけど、あの瞳は誘つとるようにしか見えん。

それに、無意識やからタチが悪い。

他のオトコにも、あの瞳を向けかねんのやから。

……オレ、育て方間違えたんやるか？

いや、オレが育てたワケやないけどな、もおちよおオトコに対する警戒心いうんを教えとくべきやったかもしれん。

せやからて、コレを意識して出来るようになられても困るんやけどな。

和葉を見下ろしたまま、小さく息を付く。

まあ、しゃーないか。

オレが気い付けとればええ事やし。

「平次？」

「……誘うんは、オレだけにしとけよ？」

意味が掴めないらしい和葉が、訝しげに眉を寄せる。

オレの目の前には、和葉のおでこ。

お誘いを受けた事やし、これくらいはええやろと、ちゅーを落とした。

keyword

「誘惑の自覚も無い瞳は、心臓に悪い」(平次)

『キスにまつわる20の御題』(<http://tw.skr.jp/kiss/>)

(21) ばいばい。

「なあ、平次い……」

声を掛けたけど、返事がない。

振り向いてみたら、ベッドに寝転んで雑誌を読んでいたハズの平次は、そのまま昼寝に突入してた。

アタシの目の前には、平次の右手。

掌を上にしてだらんと投げ出されてるその手に、ベッドに乗り上げるようにしてアタシの左手を重ねてみた。

大きな手。

アタシがこの手を傷付けたんは、冬。

今はもうその傷も、薄く痕が残っただけ。

あの時はただ夢中で。

アタシを切り離す事でしか、平次を助けられんと思つて。

あの言葉に全ての想いを託した。

それでも平次はアタシの手を離さずにいてくれたから……

重ねてた手を離して、今度は両手で包み込んでみる。

ちよつとだけ持ち上げて、手の甲にうつすらに残ってる傷痕にそつとキスしてみた。

多分もう、アタシからはこの手を離せない。
だけど……

もしも……

もしも、いつか平次がこの手を離したいと思った時に……

そんな事考えたくないけど、平次がアタシの手を離して飛び立とうとした時に……

その時に、この温かい手を解放して、アタシはもう一度あの言葉を言えるやろうか？

きゅつと平次の手を握り締めたら、強く握り返された。

「起きたん？」

平次の様子を窺おうとしたら、いきなり抱き込まれた。

「何？」

「……余計なコト考えんと……ずっと此処に居り」

「え？」

「……此処に居り」

「……平次？ちゃんと起きとる？」

「……ん」

半分寝惚けとるみたい。

せやけど……うん……。

まだ不安はあるけど、この手が離される事はないんやと思う……きつと。

……でも、今は離して欲しいかな？

「アタシは抱き枕やないんよ……」

寝てる人間は重いんよ？

そのまま寝返り打ったら、アタシが潰れてまうやん！

お願いやから、離して！！

keyword

「平次の右手の甲に残る傷に、キスをした」(和葉)

『キスにまつわる20の御題』(http://tw.skr.jp/kiss/)

(21) ばいばい。(後書き)

お題SS、これにて終了です。

順番に書き上げたものではないので、雰囲気や使っている語句に統一感がないんですが、楽しんでもらえたなら嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8889b/>

× × × (kiss ・ kiss ・ kiss)

2010年10月9日17時15分発行